



草と草の根の連帯をあらわす
草の家のシンボルマーク

〒780-0861 高知市升形 9-11 Tel 088-875-1275 Fax 088-821-0586

E-mail grh911@dream.jp HP <http://www.maroon.dti.ne.jp/kusanoie/>

「軍事対軍事」を許さず「平和の準備を」 「9条の碑をつくるこうちの会」結成

ウクライナ戦争は3年半を過ぎました。イスラエルによるガザの虐殺は、無差別爆撃から生き残った住民を飢餓で皆殺ししようという非道な状況が続いています。日本政府も私たちの暮らしは二の次に「軍事対軍事」の道を突き進んでいます。こんな政治を許せば、戦火は世界に、そして日本にも広がるでしょう。平和を準備し、平和を創ろうと6月21日、約90名の参加で「9条の碑をつくるこうちの会」結成総会を開きました。

記念講演には、世界に9条の碑を輸出しよう、日本中に9条の碑を建てようと呼びかける、伊藤千尋さん（国際ジャーナリスト）を迎えました。

伊藤さんは「憲法9条で国を守れるのか、という人がある。しかし『国を守る』で、国は守れない。この国を守るとは、国境の向こうは敵だと考えることで。双方の人が死に、国は破壊される」。では、9条は何を守るのか？「憲法9条は国を守り、国を超えて人類を守る！」「9条は偏狭な一国平和主義ではない。憲法前文は『全世界の国民がひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有する』として、9条で戦争放棄と戦力不保持をうたっている。これこそが戦争のない世界をつくっていく希望」だと語り、羅針盤となる9条の碑の意義を強調されました。

総会では、憲法施行80年（2027年）に9条の碑を、1000名以上の参加で800万円を目標に取り組むこと、そして何よりも「平和の準備」は、学ぶ運動からということで学習運動を幅広く呼びかけることなどを決定しました。共同代表には、岡田健一郎さん（高知大准教授）、松尾禎之さん（松尾酒造社長）、岡村正弘さん（草の家名誉館長）が、幹事には11団体から代表が選出されました。

参加者から「平和を実現する、語り合うこと、9条を広げること、9条に見えるものにする。という話にとっても共感し力強さを感じました」「9条が平和な未来を志向するものであるという実感がわきました。戦争の準備が進むなか『平和の準備』は、学ぶことからという初年度の取り組みに共感しました」などの感想が寄せられました。

草の家会員の皆さん

「高知に9条の碑を」と呼びかた草の家が事務局を担います。みんなで改めて憲法前文と憲法9条を読み直してみませんか。草の家には「土佐弁日本国憲法9条」もあります。「武力には武力」という発想しかない人々にきっと希望をもたらすことでしょう。一般的に碑は、過去を忘れないために建てますが、私たちが建てる9条の碑は、歴史を学び、現在を変え、平和な未来を創るために建てます。9条の意義・価値を再認識し、子や孫に、そして友人・知人に参加を広めていきましょう。

「9条の碑をつくるこうちの会」事務局長 岡村啓佐（草の家・副館長）



「2025 ピースウェイブ in こうち」を振り返って

「2025 ピースウェイブ in こうち」は戦後 80 年の節目であるピースウェイブとなり、県内外の新聞やテレビ各社の取材を受けました。

1979 年の「高知空襲展」以降、回を重ねる毎に参加企画が増え、今年から「8・15 戦争を語りつぐつどい」（同実行委員会主催）が参加となりました。この一年、私たちの気持ちとは逆行する未曾有の軍備増強が異常な速さと規模で進みの状況はさらに進行しています。「戦争は許さない」という市民のみなさんの強い思いに支えられて成功させることができましたことに厚くお礼を申し上げます。

6 月 28 日、沖縄タイムズの阿部岳編集委員「沖縄と私たち ～沖縄戦から『最前線化』まで～」の講演会を皮切りに、8 月 30 日の「見る・触れる・考える『戦争遺跡めぐりバスツアー ～高知海軍航空隊の戦争遺跡を訪ねて～』」までの 2 ヶ月間に 13 の多彩な企画が催され、高知に平和を誓う大きな波を作り出すことができました。

「平和七夕まつり」は、今年も京町アーケードに各地から寄せられた「折り鶴」を吊るすことができ、8 月 26 日には参加した高知市立西部中学校の生徒会役員 10 名と交流しました。

第 47 回「戦争と平和を考える資料展」では、TBS の「報道特集」の撮影クルーが「戦争に反対した人々」に焦点をあてて取材に訪れ 8 月 16 日に放映されました。

また、7 月 5 日には青木茂講演会「中国人強制連行・強制労働と万人坑」を開催、当時の日本軍だけでなく強制労働での加害の実態が明らかになり、参加者に強烈な驚きとなりました。そして「2026 年に『万人坑の実態』をみる旅を計画しよう」との声になっています。

高知市が主催した「第 21 回高知市平和祈念式追悼集会」は、日本原水爆被害者団体協議会のノーベル平和賞受賞式で演奏された広島市の被爆ピアノが会場に持ち込まれ、高知センター合唱団によって演奏されました。（写真）



行事名	日時・期間	会 場	主 催	入場者
「沖縄と私たち ～沖縄戦から『最前線化』まで～」阿部岳講演会（沖縄タイムズ編集委員）	6/28(土)	自由民権記念館ホール	平和な未来を考える会 日中友好協会高知支部 高知憲法アクション	100 名
第 47 回戦争と平和を考える資料展	6/28(土)～7/8(火)	自由民権記念館	同 実行委員会	463 名
第 43 回平和七夕まつり	6/29(日)～7/27(日)	京町商店街	平和資料館・草の家（共催・京町商店街）	29 束
ピースウェイブスタートのつどい	6/29(日)	京町商店街	平和資料館・草の家	約 40 名
第 41 回高知平和美術展	7/1(火)～7/6(日)	高知県立美術館 県民ギャラリー	高知平和美術会・高知県革新懇	396 名
第 21 回高知市平和祈念式追悼集会	7/4(金)	龍馬スタジアム入口「高知市平和祈念の碑」前	高知市	80 名
灯ろう流し	7/4(金)	鏡川河畔みどりの広場	新日本婦人の会高知市支部	14 名
青木茂講演会「中国人強制連行・強制労働と万人坑」	7/5(土)	自由民権記念館ホール	同 実行委員会	100 名
高知市民劇場第 375 回例会 Pカンパニー座公演「5月35日」	7/5(土)	高知県立県民文化ホール・オレンジ	高知市民劇場	
2025 ピースアクション in こうち	7/5(土)	高知県立美術館	高知県生活協同組合連合会	270 名
第 38 回反核平和コンサート	7/6(日)	高知県立県民文化ホール・グリーン	同 実行委員会	312 名
8・15 戦争を語りつぐつどい	8/15(金)	高知県人権啓発センター	同 実行委員会	133 名
見る・触れる・考える「戦争遺跡めぐりバスツアー～高知海軍航空隊の戦争遺跡を訪ねて～」	8/30(土)	南国市・高知大学ほか	掩体を文化財として守り育てる会 共催：平和資料館・草の家	22 名

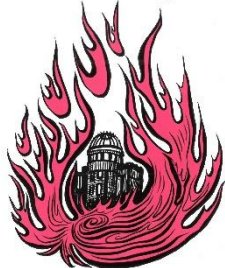
山根和代さんを偲ぶ

去る7月17日、「草の家」を世界に繋いでくださった山根和代さんが逝去されました。春頃から体調が良くないということをご本人から聞いていました。5月初めに入院先から今年のピースウェイブの「戦争と平和を考える資料展」に「ニュージーランド核実験被災」に関する展示ができないかとの相談を受けましたが、すでに展示内容が固まっていたので一旦お断りし、来年なら可能であるとの返事をしましたところ、6月29日に以下のようなメールを頂きました「来年の話ですが 私は高知の核実験被災者と共通した問題や情報などがあるので高知での展示やニュージーランドの元船員の方々との交流はとても重要だと思います」と記され、「私ごとですが、現在 入院して闘病中です。昨日容態が急変して動けなくなりました」とありました。最後まで平和への取組を続けられ、貫き通された情熱と意志に心から敬意を表したいと思います。そして来年の「資料展」には「ニュージーランド核実験被災」に関する展示を実現したいと思います。

山根和代さんは、1989年の草の家の創設当初から活動に関わって来られました。特に語学を活かされ世界との橋渡し役を担われました。1992年イギリスのブラッドフォード大学での第1回平和博物館国際会議に参加され、草の家の活動を世界に紹介し、それが縁となって世界各地から平和活動家が草の家を訪れるようになりました。山根さんはその内容を「草の家国際交流ニュース」として世界に届けたのです。1995年7月には『平和の火』（原作山口勇子）を英訳、それに憲法9条の12カ国語訳を紹介した『The Flame of Hiroshima and Article 9』（『広島火と9条』）を刊行し、第2回平和博物館国際会議（1995.8 オーストリア）などで高く評価されました。

Grass Roots House Booklet No. 6

The Flame of Hiroshima and Article 9



*Best swords into plowshares, and
spears into pruninghooks.
Isaiah, Chapter 2, 4*

山根さんが京都に移られてからも機会ある毎に草の家の存在を発信し続けてくれました。そして『MUSE』への寄稿を繰り返し勧めて下さいましたが、十分に応えることができなかったことを悔いております。

近年では、戦争遺跡の保存についても力添えを頂きました。2021年に広島のスッカースタジアム建設現場で旧陸軍輜重隊跡の大規模な被爆遺構が検出されました。加害と被害の歴史が刻まれた戦争遺跡として広島市に対して現地保存を求めましたが、市は耳を傾けませんでした。山根さんに「世界に訴えて欲しい」と持ちかけたところ、直ちに、保存の重要性について発信して下さい、アメリカやオランダなどの著名人から広島市長宛に保存要望が送られてきました。結果は、保存は果たせず、遺構は壊されましたが、このとき示された山根さんの素早い行動力には驚かされました。いつでもどこでもこのように俊敏に行動されていたのだらうと思います。

戦後80年が経過した今、日本は再び戦禍を被りかねない危険な道を進み始めています。高知では「9条の碑をつくるこうちの会」を立上げ、2027年、憲法発布80年に建立を目指しています。草の家はその事務局を担っています。草の家は、山根さんから数えきれないほど大切なものをいただきました。碑の建立はそれに応えることでもあると思います。優しい微笑みがいつまでも脳裏から消えません。有難うございました。

出原恵三（平和資料館・草の家 館長）



「平和資料館・草の家創立30周年記念講演・レセプション」にて
金英丸・岡村正弘さんとともに。山根和代さんと（2019年11月24日）

「戦争遺跡めぐり」バスツアー <寄稿>

河村明日加（高知大学人文社会科学部 人文社会学科 人文科学コース 4年）

私は県外の出身で、高知に暮らして4年目になります。これまで朝倉の忠霊塔の調査には参加してきましたが、県内の戦争遺跡を訪れる機会はほとんどなく、今回のツアーは私にとって初めて「現地に立つことの重み」を実感できる体験となりました。

ツアーはバスに乗り、草の家の方々の解説を聞きながら進みました。道中では、普段何気なく通り過ぎている山や道にも、本土決戦に備えて掘られた塹壕や横穴が残っていると説明を受け、目の前の風景が急に違って見えました。

まず印象に残ったのは、高知城そのものが戦争遺跡であるという事実でした。B29の尾翼が梅の段に墜落したことや、堀が空襲の瓦礫で埋められたこと。普段は近世の歴史的建造物としてしか見ていなかった場所に、アジア・太平洋戦争の記憶が刻まれていることに、強い衝撃を受けました。

次に訪れた高知大学物部キャンパスでは、海軍航空隊通信所跡を見学しました。長い通路や地下の部屋、通気口の跡を実際に目にし、当時ここで通信を担って



海軍航空隊通信所の地下壕跡

いた人々の緊張感を思い描くことができました。同じ大学に通いながら、かつてここから同世代、あるいはもっと若い青年が特攻隊員として出撃していったという事実を知る学生はどれくらいいるのでしょうか。私自身を含め、若い世代がこうした高知県の戦争遺跡の存在を認識し、守り伝えていく必要があると強く感じました。

さらにバスを進め、前浜掩体群を訪れました。のどかな農村風景の中に今も残る戦争の痕跡を目の当たりにしました。掩体は女性や朝鮮人労働者の手で築かれたと聞き、その重労働の背景に軍隊の理不尽さを感じる一方、戦後には住居として利用された掩体もあると知り、戦争遺跡が地域社会の暮らしと複雑に結びついていたことを学びました。

こうした体験を通じて、戦争遺跡をただ「過去のもの」としてしまわず、未来に伝えていく責任を若い世代が担っているのだと改めて感じました。高知県は文化財保護・活用に消極的であると聞く一方、南国市が積極的に保存に取り組んでいることを知り、地域によって姿勢が異なる現実にも考えさせられました。

今回の見学で得た学びを糧に、今後も歴史と文化を守り伝える視点を大切にして勉学を続けたいと思います。このような機会を設けてくださった平和資料館・草の家の皆様、掩体壕を文化財として守り育てる会の皆様、南国市教育委員会の皆様に心より御礼申し上げます。



南国市・前浜掩体群

「心と歩む平和」 <寄稿>

佐々木文葉

2025年5月23日、「平和資料館・草の家」を訪れ、恥ずかしながら初めて高知大空襲を知った。

被害を受けた区域を表す赤い地図が今でも目に焼き付いている。

印象に残ったのは当時の国民学校のテストだ。『わが国の第一代天皇をどなたと申しますか?』という知識問題から『兄さんはどんな声で「では行って参ります」と言いましたか?』という思考問題まであった。後者の正解は「大きな声」だった。怖がらずに堂々と任務に向かう勇姿が美德とされていたからだ。

戦争が日々の暮らしや教育の中に深く入り込んでいた。自分の思考も感情も身体もすべてを国のために捧げることが強制された苦しさは言葉にできない。家族との別れ方に「正解」が用意されるというのはどんな気分だろうか?子どもたちはどんな気持ちで鉛筆を走らせたのか?想像しても答えは分からなかった。

私は現在、長崎で薬学を学びながら、PLabのPeace Buddy（ピースバディ、以下バディ）として活動している。長崎を訪れる修学旅行生やインバウンドに向け、平和公園や周辺の遺構について話す。教えるのでも解説するのとも違って、自分の言葉で自分が思う平和を伝えるので、ガイドではなくバディ（相棒）と呼ぶ。

今年の8月は、スウェーデンの平和団体 Svenska Freds に英語でバディを行った。彼らの原爆に関する知識量は豊富で、知識面での説明はほとんど必要なかった。しかし、被爆者の方の悲しみや生きづらさ、差別に直面してきた現実を語ると涙を流していた。帰国後、児童に原爆の恐ろしさを授業する予定だという。(写真・下)

また、バディとして杉並区の中学生と共に原爆について考える機会もあった。「今の日本は平和か?」「核兵器がないことと戦争がないことはどちらが平和なのか?」といった鋭い質問を投げかけてきた。特に「スマホのタップ1回が核兵器発射のボタンだと想像してください」という言葉は、核兵器を使用することの重みがどんどん軽くなってきていることを表し、心がズキッとした。中学生ながら遠くの地で学んだことを家族や友達に共有して平和仲間を増やしていくと力強く決心していた。

もう誰にも高知大空襲のような惨状も原爆のような悲劇も体験してほしくない。だから私は世界や日本の人に原爆について知ってもらったり、平和について考えたりするきっかけ作りを行って平和を少しずつ身近なものに広げていっている。

私にとって平和とは自分らしさで自分のありのままを表現できる環境があることだ。私はバディとしてこれを伝え続ける。できることは微力だが無力ではない。そう信じているから。



原水禁世界大会・長崎集会
アメリカで活動されているフィリピンの方と



ささき あやは・長崎大学薬学部2年

広島県出身の被爆3世。長崎に来てからバディなどを通して平和活動を始めた。被爆者の現実や想いを年代、国籍、ジェンダーに関係なく伝えるべく奮闘している。

連絡先 ⇒ rachelgardner427@gmail.com

インスタグラム ⇒ [@bekind_beme](https://www.instagram.com/bekind_beme)

～撫順・瀋陽・北票・阜新・旅順・大連～ に参加して

去る6月16日～6月22日、「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」関西支部の第9次訪中団に参加し、中国遼寧省の撫順、瀋陽、北票、阜新、旅順、大連を訪ねました。これらの地は「旧満州」の南部に属し、日清戦争、日露戦争、満州事変、日中全面戦争と日本の侵略戦争を辿る上で欠かすことのできない要衝であり、今でも侵略の痕跡が随所に見られます。今回の訪問の目的は、侵略の跡を辿ることと万人坑の実態に触れることでした。

16日昼過ぎに関西空港を飛び立ち、夕方、瀋陽国際空港に到着、そのまま炭鉱都市撫順に専用バスで向かい、その晩は撫順市の煤都旅館に泊まりました。この旅館はかつての撫順大和旅館であり炭鉱経営者たちの社交クラブとしても使っていたところで野外音楽堂や公園などがそのまま残っています。翌朝「撫順の奇蹟」として知られる撫順戦犯管理所を訪れ、日本語の上手な職員に館内の案内して頂き、当時の資料や写真パネルなどを見学し



撫順炭鉱 (2025.06.17 撮影)

管理所の様子に触れることができました。撫順は大規模な露天掘り炭鉱で知られていますが、現地に立ってその巨大さに驚きました。露天掘りの坑の大きさは東西6.6km、南北2.2km、深さ420mもあります。対岸は霞んでいます。日露戦争後の1905年から敗戦までの40年間、日本が独占支配し2億トンの石炭を略奪、採掘に伴い25万人が亡くなったと言われています。また満州事変(1931年)の翌年に住民3000人が虐殺された平頂山事件のあったところでもあります。

午後2時、撫順をあとに万人坑のある北票に向かいました。万人坑とは、日中戦争中に主に日本の民間企業によって炭鉱現場など劣悪な労働環境の中で酷使され、犠牲になった人々(中国では工労と呼ばれています)が埋められた集団墓、「人捨て場」のことです。日本ではあまり知られていませんが、青木茂さんによって調査研究されその実態が少しずつ明らかになってきています。

北票は撫順から約300km西方、4時間の行程でした。18日午前、台吉万人坑遺址を訪れました。ここは北票炭鉱で犠牲になった工労たちの「万人坑」です。解放後、集中埋葬された遺体を丁寧に発掘調査して検出遺体を覆屋で囲み、そのまま展示室となっています。上を向いている遺体、俯いている遺体、横向きの遺体などが密集して並び上下にも重なっています。犠牲者が少ない頃は一体ずつ坑を掘り埋葬していましたが、戦争の激化とともに理不尽な労働強化が強られる中で、集中埋葬(「廃棄」)へ、さらに死者



北票万人坑 (2025.06.18 撮影)

が多くなると谷地への「投棄」も行われています。北票の万人坑は1943年から形成され、ここでの死亡率は97%であったとのこと。午後には阜新万人坑へ、ここも炭鉱工労たちの万人坑です。高さ20m以上の立派な「阜新万人坑死難鉱工記念碑」が屹立しており、その下に献花・黙祷して展示館に入りました。ここには二つの展示館があり両者とも万人坑発掘現場がそっくり展示場となっています。一つの展示館は一般工労犠牲者の集団墓で15m×5mの広さを有し、緩やかな斜面の上方に頭を向けて肩が触れ合うほ



阜新万人坑（2025.06.18 撮影）

どに密集して白骨遺体が並んでいます。もう一つの展示館は1942年9月に脱走を企てて失敗した工労たちが集団虐殺されて、そのまま埋められた場所で20m×2mほどのくぼみに遺骨が何層にも重なり、頭部に銃弾を受けた孔の見えるものもあります。

工労たちの多くは騙されてここに連れて来られて奴隷労働を強いられ亡くなっていました。どれほど苦しく辛い毎日であったろうとか、想像を絶します。1942年、1943年といえ、アジア太平洋戦争で日本軍が占領地を最大

に広げながらも、戦局に陰りが見え始めた頃です。当時日本では「一機でも多く、一日でも早く、飛行機を前線へ」こんな掛け声が叫ばれていました。しかし戦場での死はいわば表面的な犠牲であって、その背後では何倍もの中国人工労たちの犠牲があったことを万人坑は示しています。この事実を知らなければ、戦争を深く理解することはできないと思います。日本のはじめた戦争がどれほど大きな犠牲者を生み、いかに悲惨な犠牲の連鎖を生むのか、むき出しになった双眸の群を前に言葉を失いました。

名前も年齢も出身地も記録されることなく殺され捨てられた工労たちは何も語れない以上、私たちが彼らの憤り、苦しさ、辛さ、彼らの存在を伝えること、万人坑の調査・研究を進め歴史の「生き証人」として大切に保存することが私たちの務めだと思います。本来ならば日本政府は調査、保存に全面的に協力すべきであると思います。

19日には瀋陽市内で張作霖爆殺（1928年）現場、15年戦争の発端となった柳条湖爆破現場（9・18事変）や日本軍が最初に攻撃した北大營の戦争遺跡を見学、20日には高速鉄道で遼東半島を南下し、旅順、大連に向かいました。旅順は日清戦争中の1894年11月に最初の大量住民虐殺を行ったところ、日露戦争では旅順港閉塞作戦や激戦地203高地の所在地でもあります。また安重根が処刑された旅順監獄も有名です。瀋陽や大連の中心市街地には大日本帝国時代を象徴する東洋拓殖株式会社、朝鮮銀行、横浜正金銀行、警察署などの重厚な建物が当時のままの姿で残っており省や市の重点文物（文化財）となって保存されています。

今年は戦後80年、日本各地の歴史系博物館などでは、戦争関連の展示がかまびすしく行われていますが、その内容は空襲被害、物資欠乏など被害の側面のみが示され、加害性、侵略性に言及しているものはほとんど有りません。日清戦争からアジア太平洋戦争敗戦までの約50年の間、繰り返された戦争で日本が戦場となったのは最後の一年足らずだけです。被害に先行して何倍もの加害がありました。その加害に触れなくて被害ばかりを示したのでは、日本は被害でしか戦争を語れないことになってしま



大連の横浜正金銀行（2025.06.20 撮影）

まいます。近代日本はアジアで何をしてきたのか、大急ぎで万人坑などの加害の歴史に向き合わなければ歴史に大きな空白を作ってしまう。歴史にまさる羅針盤はありません。事実を直視し確かな未来を構築していきたいと思います。

出原恵三（平和資料館・草の家 館長）

遺骨との対面（山口県宇部市・長生炭鉱の遺骨発掘調査活動に参加）

この間、一歩ずつ一歩ずつ確実に歩みを進めていた長生炭鉱の遺骨発掘調査活動、8月25日の調査でついに遺骨に出会うことができました。韓国のダイバーの金秀恩さん、金京洙さん本坑道の入り口付近から、ブーツや衣服とともに遺骨を発見し大腿骨と思われる骨など3つを収容しました。26日も引き続き調査を行うと聞き、仕事も休みだったので現地に駆け付けました。現地に行くのは2月以来ですが、今回も夜中に出発し車・フェリー・JRを乗り継いでまた夜中に帰ってくる強行ツアーです。



ダイバーの2人と御遺骨の帰りを迎える。
海底炭坑の長生炭坑は、沖に見えるピーヤ（排気・排水筒）と呼ばれる円柱から本坑道内部へ入っていく。

2月は雨も降り寒かったのに比べ、今回は日陰のない砂浜で暑さとの闘いでしたが猛暑の中、昨日の一報を受け、多くの報道関係の方が集まり、そして国内在住の遺族の方お二人も駆け付けました。

搜索そのものも過酷ですが水深43メートルからの帰還も、時間をかけて減圧をしながら戻ってこなければなりません。午前10時過ぎの調査から約5時間後、今回収容されたのは一人の頭蓋骨でした。表面は黒ずんでいましたが、歯はきれいに残っており、青年のように感じました。（写真・下）

20年程前にも北海道の朱鞠内で強制連行の犠牲者の遺骨と向き合いました。遺骨を前にして思うことはやはり同じで、この人はどんな人だろう？家族は？故郷は？どのような人生を送り、どうしてここに来て、どのような状況で最期を迎えたのだろうか？

そして家族を残して息絶えなければならないことがどれだけ無念だったか…残された家族がその後抱え続けた喪失感とやりきれなさ…想像しかできませんが、遺族の方、その場にいた多くの人が同じようなことを感じていることが伝わってきました。



その辺りにはまだ4人位の遺骨が固まってあるそうです。地底の奥深く、暗くて冷たいところから早く地上に連れ出し遺族のもとに戻ることができればと思います。

埼玉で講演を聞いた安田菜津紀さんの著書「遺骨と祈り」をこの旅の間に読みました。

「死者、そして遺骨にどう向き合うかに、その社会が命というものをどのように扱うのかが浮き彫りになる。死者をないがしろにし、その生を『なかったこと』にする国が、社会が、生きた人間の尊厳を守れるとは思えない」。

市民団体が長年取り組んできた活動ですが、一年前に坑口を開いてからは地元の方も含めた市民の関心も高まり、そこからわずか一年足らずでついに遺骨にたどり着きました。その大きな立役者でもあるプロ

ダイバーの伊左次さん中心に来年2月に大きなプロジェクトを企画し準備を進めていくそうです。改めて日本政府がこの問題とどう向き合うのか、その姿勢が問われます。

それは同時に私たちへの問いかけでもあります。オキナワ、フクシマ、ガザとも重ねて、あらゆる犠牲に私たちの社会の問題として向き合い考えなければと思います。

宮川 真幸（平和資料館・草の家 理事）



フリージャーナリストの安田菜津紀さんと